1. 母性内科研修を終えて

３ヶ月間という短期間でしたが、母性内科研修で多くのことを教えて頂きました。

まず１つ目は、“妊婦の正常”、妊娠経過に伴い変化する正常値を理解することができたことです。２点目は妊娠合併症の管理です。一般的な高血圧・糖尿病の管理とは異なるため、貴重な経験になりました。また妊婦の腹痛の鑑別や使用可能な薬の知識など、実際に一般内科外来や当直で遭遇しうる状況も経験することができました。

３点目が、次世代を見据えた広い視野を学んだことです。合併症妊娠では、妊娠前から次回妊娠へ向けた管理、次世代でのアウトカムまで念頭においた治療に深く感銘を受けました。

　　　森　紘子  
東京医療センター　総合内科　後期研修医

1. 母性内科研修を経験して　～プライマリ・ケア医の視点から～

20〜40代、とくに産後の女性は、健康診断などの予防医療も含めて、医療から遠ざかる傾向にあります。プライマリ・ケア医は、風邪などの急性疾患や子どもの乳児健診・予防接種などで、頻繁にこの年代の女性に出会うにもかかわらず、とくに妊婦・授乳婦に苦手意識をもっていることがしばしばです。

　プライマリ・ケア医の視点から妊娠管理をみると、身体の気にかかる症状について健康相談できる「かかりつけ医」としての役割の他、妊娠前から治療をしている病気もしくは妊娠中に診断された病気の主治医としての役割があると考えられました。とくに、妊娠に伴ってあらたに併発した妊娠糖尿病、妊娠高血圧腎症といった疾患については、産婦人科医のかかわりはあくまでも一時的であり、女性の生涯にわたって継続的にサポートできるのはプライマリ・ケア医であると痛感しました。母性内科での研修を通じ、産婦人科医や助産師でなくても、医療者として女性に対してできることがたくさんあると日々実感でき、普段診療している女性への診かたも変わってきました。

杉谷真季

東京医療センター 総合内科　後期研修医